

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（一般研究）

研究代表者 所属・職名 上越教育大学附属中学校・前校長

氏 名 山縣 耕太郎

研究期間 令和2年度～令和3年度

研究プロジェクトの名称	A I 時代を主体的・共創的に生き抜く生徒の育成 - 自己調整, 創造性, 人間性に着目して -
研究プロジェクトの概要	<p>知能をもつロボット, I o T, A R などに囲まれ, 世の中が加速度的に変化する現在の中で, 生徒たちはもちろん, 大人でさえも自分自身で生き方をデザインしなければならない。また, これまでの社会における価値観が大きく揺らぎ, 自身の生き方に加えて, 自分と自然や社会との関係を見失ったり, 社会の在り方を判断できなかつたりすることが予想される。そのような時代においては, 学び続ける意欲や学び方を身に付けた人を育てることが, 一層求められる。また, 多くの仕事が A I に代替される中で, 代替不可能な人間としての強みである「創造性」や「人間性」がより重要視される時代となる。</p> <p>このような数年後の予想もできない現在やその予想もできない未来も含めて, 「A I 時代」と呼ぶこととした。多様な価値観をもつ他者と協働して共に新しい社会を切り拓くためには, どんな未来や世の中にしたいのか, 人として何を大切に生きていきたいのかを考え, 一人一人が想いやビジョンを描き, 合意を図りながら社会を形成していく汎用的な資質・能力が求められる。人, もの, ことの本質をつかみ, 正しい判断ができるなどの未来を創り上げるために必要な資質・能力を備えた生徒の姿を「主体的・共創的に生き抜く生徒」と定義し, そうした生徒を育成するための教育課程の研究開発を本プロジェクトの中心とする。</p> <p>1 研究仮説</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>各教科等の「見方・考え方」に加え, 自己調整, 創造性, 人間性に着目して, 教科の本質に迫る学びを教育課程全体で展開することにより, 生徒は, A I 時代を主体的・共創的に生き抜く姿となっていくだろう。</p> </div> <p>2 研究方法</p> <p>本研究の実践を進めるにあたり, 各教科, 特別活動, 道徳科, T &amp; Q など, 教育課程全体で研究仮説に迫るために以下の五つの手立てを設定し, 実践・検証する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 未来志向・解が一つではない教材(題材)の開発</li> <li>(2) 多様な価値観をもつ人々と接したり対話したりする活動の場の設定</li> <li>(3) 自己調整を促す学習過程等の工夫</li> <li>(4) 振り返りの場面の設定</li> <li>(5) I C T 機器の活用</li> </ol>

<p><b>研究成果の概要</b></p> <p>※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。</p>	<p>1 自己調整しながら学ぶ生徒の姿の明確化</p> <p>自己調整しながら学ぶ姿を「目標達成に向けて生徒自らが自己調整のスキルをサイクルとして回せる」と定義し、生徒が自己調整しながら学びを進める中で発揮するスキルを整理した。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>[目標設定]：課題解決に向けた目標を設定する。          [手段構築]：目標を達成するための手段を検討し、選択する。          [準備試行]：選択した手段を試行し、その有効性を検討する。          [客観分析]：結果や過程を振り返り、客観的に分析する。          [比較検討]：計画の内容や特徴などについて比較しながら吟味し、判断する。</p> </div> <p>2 研究仮説に迫る五つの手立てについて</p> <p>研究仮説に迫る手立ての (1)未来志向・解が一つではない教材(題材)の開発、(3)自己調整を促す学習過程等の工夫として、自己調整に着目して生徒が既習内容の知識や技能を総合的に活用するパフォーマンス課題は最適であり、全ての教科等で設定して取り組んだ。現実社会や学校生活、私生活の状況を基にした内容や現実起こりうるようなリアルな描写の架空シナリオを基にした内容のパフォーマンス課題に取り組むことで、生徒は、各教科等の見方・考え方を働かせながら自己調整のサイクルを回し、様々な解を見いだすことができた。また、評価の3観点を踏まえてルーブリックを提示したことで、多くの生徒がスキルを意識して状況を的確に判断できるようになり、自己調整のサイクルを自覚して回しながら、単元のねらいに迫ることができた。</p> <p>3 自己調整の視点から開発した振り返りシートと生活記録ノートの活用</p> <p>生徒が自ら学びを振り返りながら自己調整して課題解決していけるよう、全ての教科等において、共通した振り返りシート「自己調整振り返りシート」を活用した。また、1日を振り返って自分の学習状況をモニタリングできるよう、これまで活用してきた生活記録ノートの内容を変更し、生活記録ノート「モニタリングノート」として活用した。</p> <p>モニタリングノートに自己調整のスキルを意識して記述することで、生徒は様々な課題について追究状況や理解状況などを客観的に判断して、行動できるようになっていた。</p>
<p><b>研究成果の発表状況</b></p>	<p>&lt;公開授業&gt;</p> <p>令和2年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTミニ公開授業(2020年10月26日)</li> <li>・ICT公開授業(2021年2月2日～5日)</li> <li>・Apple Open Day(2021年2月22日) ※オンライン</li> </ul> <p>令和3年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者協力者打合せ(2021年4月21日)</li> <li>・指導者協力者打合せ(2021年6月～7月)</li> <li>・教育研究協議会(2021年10月11日) ※オンライン</li> <li>・Apple Open Day(2022年1月31日) ※オンライン</li> <li>・指導者協力者打合せ(2022年2月21日) ※オンライン</li> </ul>

	<p>&lt;出版物&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究紀要 2021</li> <li>・実践事例集 2021</li> <li>・「G I G Aスクール時代の学校 -自己調整を促し創造性を発揮する I C Tの活用-」</li> </ul>
<p>学校現場や授業への研究成果の還元について</p>	<p>本研究では、当校研究主題について、創造性、自己調整、人間性に着目し、研究仮説に迫る五つの手立てを实践、検証した。その中で、自己調整については、生徒自らが自己調整のスキルをサイクルとして回しながら学ぶ姿を整理した。そして、生徒の自己調整を促し、生徒自身が教科の本質に迫る学びを展開できるよう、パフォーマンス課題を設定した。各教科でパフォーマンス課題の内容を吟味し、カギとなる自己調整のスキルを見極めて手立てを講じていったことは、効果的であったと実感している。</p> <p>また、パフォーマンス課題を生徒に取り組みさせる際、ルーブリックを明確に示した上で取り組みせるとともに、ルーブリックを踏まえて自己調整振り返りシートを記入させることによって、教師は評価の3観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」をよりの確にみとっていくことができた。</p> <p>以上の内容については、他校にも還元できる研究成果である。この成果は、今年度の研究紀要及び実践事例集にまとめ、発表している。</p> <p>本研究については、来年度、最終年度を迎え、人間性に着目してパフォーマンス課題を設定していく。そのため、引き続き研究成果を広く発信していくことに努めていく。</p>